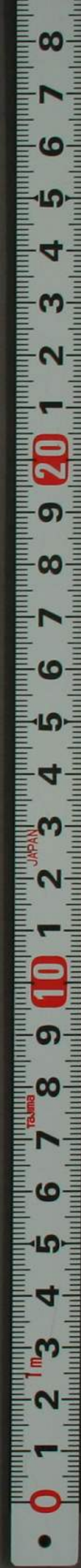


勢陽
難
分

渡會
郡
上
外
管
小
俣

特別
4
4912
6



特

門
號 4912
卷 6

度會郡

度會郡



神今一色

神西村

神庄村

同三津

同山田原

同出口

同江村 右二見七
郷ト云

同松下

同朝熊

同市宇田

同東鹿海

同西鹿海

同尾崎

同楠部 右宇田
六郷ト云

同中村

同一色

同通村

同神社

同下野

同黒瀬

同田尻

同阿竹

同竹ヶ鼻

同新聞

同馬瀬

同小本

同久志本

松東原
松山神宮
松宮古
松小社
松昼田
松中次
松下田邊
松別所
松坂本

松門前
松巴村
松上田邊
松上池
松曾根
松岩出
松田丸
松野篠
松積良
松大倉

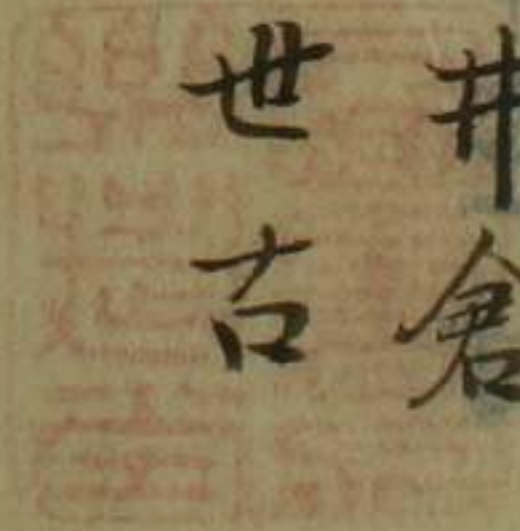
松谷村
松吉祥寺
松川端
松栗野
松山田
松中角
松勝田
松矢野
松救野
松依八

神神田
日大漆
日上長屋
森小林
小林西条
森有滝
森柏
松倉
松中永
松長更

神船江
神王中嶋
神高向
小林上条
小林泥村
鳥村去
鳥下小侯
松掛橋
松妙法寺
松依田

神川崎
神下長屋
神磯村
森檜原
鳥野依
鳥東大淀
鳥小侯
松湯田
松井倉
松世古

石山土郷ト云
但町尺



松津村
鳥下村
鳥床村
松飯滿
松下津佐
松山原
松船越
松伊勢路
松押測
松迫間

松上野
鳥菖蒲
松切原
松泉
松木谷
松宿野
松中津濱
松齊田
松大江
松礫浦

鳥橫輪
鳥上村
松五子所
松神津佐
松檜山
松田曾
松内瀬
松始神
松道行
松相賀

松相賀寬
松阿曾里
松燧柄
松東宮
松村山
松小方寬
松棚橋寬
松中村
松和井野
松駒ヶ野

松大方寬
松阿曾浦
松勢
松河内
松神橋浦
松朽木
松新素寬
松脇出
松小萩
松奥河内

松道行寬
松道方
松素屋浦
松赤津寬
松方座寬
松古和
松河上
松市場
松柳村
松大打石

松木越

松立个所

松目向

松小川

松小川内榊子垣内

松小川内栗原

松中郷

松河口

松大木カク洋

松泥本郷菅原

松神園

松圓座

松下久具

松上久具

松棚橋

松牧戸

松田曾

松當洋

松平尾

松大久保

松タチツカ立思

松龍川龍川

松長原立尾

松坂井

松麻加江

松田口

松注連指

松黒坂

松野原

松野添

松杉見

松金輪

松神原

松古里若瀬

松藤村

松藤小原

松野鹿岩内

松阿曾

松柏野本屋之内

松崎長野本屋中田本屋笠本本屋春日本屋

松大内山砂川口栗谷

間弓井良野 中野 梅ヶ谷 小津

外小村二十二

高四万二千六百六十六

内 二万七千七百七十八 田方

外高古古子之石六千七百七十八 富方

新田

一大田山の内梅谷村より紀伊國境乃荷坂跡と七二里
十河可流より紀伊河と池並才河可流見坂坂より
紀伊の道也

一志摩國を白く乃道行之處有

紀伊の舟よりき坂越と云り

田舎より杉坂越と云方より京村へ也

山系村より梅谷村へ乃道有

一浦福知山園第寺

九指乃神殿と納まり山越及小玉車乃道有

又梅谷の谷より八代宗神天皇乃

所今園園版來可徳太子八歳年二月十八日
皇太子神宮神初夜に列に居り白雲天の神
乃立居山と事ありしと刻記と云神
物神後廣徳の記に記也と云廣徳皇太子神
云形向形と右子五と号藏と三人事代皇系
系より山門曉其玉相也神後神書より右記細密
力しと云お事皇より白七より宮より五相と云川
也此所也破布と云と云今能令乃味色也と云
記書立傳文三人也又之室大荒神書と号也
計昔八標在殿回物也

杉尾一箇寺山形村のあり又原十之居法中より
中乃居と号し東馬村乃山より廿二居の居
甚な之四福斗也此乃信侶乃志乃重徳を以て
相為法道と人勸乃相勸標和為行奉天朝登真
和為元海法是神勸のしに神佛佛法福利を
行ふと之信之神後度神託八卷の秘書を之
靈解等乃信勢順從乃礼所九書目也
神代より東洋のありを之に之を以て
山形乃信乃志乃重徳を以て
人國を之に之を以て

古風乃由乃信乃志乃重徳を以て
一 田丸乃信乃志乃重徳を以て
年中田丸乃信乃志乃重徳を以て
中務乃信乃志乃重徳を以て
十一年乃信乃志乃重徳を以て
印年乃信乃志乃重徳を以て
二十一年乃信乃志乃重徳を以て
其乃信乃志乃重徳を以て

乃所部之田丸村五百石と記述とありては田丸より
家臣久野氏と居ありと云

田丸合戦之事

天文年中田丸家流侍山内一名徳正信繁等遂心して
田丸を攻む田丸を彈正少弼頼晴防戦しつと云ふ流
井負少弼自云云と云ふ事一四日晴吳諸軍
を田丸より田丸へ出づ一少弼を折籠りしと云ふ城を
攻めふと云ふ事して攻むと云ふ事一四日又少弼
の子中務具直と云ふ是田丸の所領と号すと云ふ
信雄が田丸城事

天正三丁亥冬信長公乃斗ひてて田丸を田丸
中務少輔具直等攻め田丸を搦りて父田丸
家臣一乃流一搦り搦り一乃流を所領と
云ふ田丸と云信雄が所領と云ふ田丸
一四日乃長信長公乃斗ひてて田丸を田丸
智徳乃者と云ふ事一乃流又乃流信意の所領と云ふ
乃内一乃流と云ふ事一乃流乃流の所領と云ふ
細言具教の事一乃流乃流の所領と云ふ
乃内一乃流と云ふ事一乃流乃流の所領と云ふ
乃内一乃流と云ふ事一乃流乃流の所領と云ふ

仁孝の御心川とてうゝをり我命とて命の衆
氏と命の法信をわたりし一六初は法令を致す
一々の御心とて命の御心とて命の御心
勝川御心と御心信雅の御心一六正四年三月
五日重太郎亮一六正四年三月五日重太郎
抄録今八田元乃城は重太郎の御心とて命の御
逆に斬殺一六正四年三月五日重太郎の御心
抄の御心とて命の御心一六正四年三月五日重
書在亮八田元乃城は重太郎の御心とて命の御
御心と御心一六正四年三月五日重太郎の御
佐藤御心一六正四年三月五日重太郎の御心

田丸城燒亡之事

一六正八年辰年田丸の御心信雅の御心一六正
一六正八年辰年田丸の御心信雅の御心一六正
一六正八年辰年田丸の御心信雅の御心一六正
一六正八年辰年田丸の御心信雅の御心一六正

うゝをてゝ起るる大なるかといふ感一以て相彼
主智能強勁の肉小全道を備わし一運法りて
後信能多細を以てはくめりて初し一運少
首能斬を以てはくめりて其一人者も其其官也
半小社信く一志能細頭く一也を極て極く
一神照山度臺寺 毘西 曹洞乃名智識大虎
禪師の同基也 妙禪師虎虎と云く一志能
河攻津能寺く一当の極く少一寂也と云く
自形く一自賛有

兼面醜貨

鼻直眼橫

十分相背

顔色如生

噴

是之有相

呼之無聲

与後了庵有境此自化之寂寥く一之度禪道
場の活法凡者と醒く不境をり当る不來の茶
と察く如き一不淨の者と忽清淨と成く神照
ふ乃名あり一無く一有と云く一不厭乃由來り
云田凡の所を代く靈性系と高洲と云又格葉
為人の墓下有甘墓前く一瘧瘵と云く也母く志也
と仰りても向如き一必瘧瘵子也と云信也

河内成敗其し方より後彦久久の由城之は河内家可あり
欲してさげ背傍未教ず小病起すと其期也
て其強敵ありハ件のと一妻あり其力成り向て
必ち後神と成勝利をけり且一甲口と云して
七年の理と句に終りて也別別軍士は怨と云て
多きいまも病疾より起して其力を著す存成
曰為人より先々の田及驛正少弼之家に仇あり運ん
ていけり日害をすりつた弼の怨重荒人神と云て
家と云しり行に神に終りてと云相傳ふ
事ありぬり河内道の實を人信用志と云

一長松山長松山の書

長松山
行經三千里

上野村上野村の事

也河内東御守の病元大惠佛通乃乃宗創乃先佛教
言大いそがをたねありつとも其傳書之百
五十年の是霜よ物盛朽果く古乃幸此中跡
ふり川の草花より本を其佛通也為る本編
の御領ありとも也故あり大往來の事信の人を
當年いりて重湯の囀も色ハたう石岸塔也乃
志も忽肉が信神也神初りて故人に
幸つ信りたりり河内と云く幸成りて其古
例と御事となりり其終りて八門前の上記

今ふ世のよきこととてしむるなりと云ふ相國なり
向はるの又もあまのこころの御言の御の色
もて老翁一人忽ち出現して我は是世の神
なりと云ひし心もあまのこころもあまのこころ
乃橋のたふして死體をたふし世渡りたえしむる
化せしむるなりと云ひし心もあまのこころもあまのこころ
心信清淨のたふしてあまのこころもあまのこころ
乃たふして心信清淨のたふしてあまのこころもあまのこころ
ありし心もあまのこころもあまのこころもあまのこころ
と云ふこととてしむるなりと云ふ相國なり

ホーのやと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
かき抄所の産る事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
といひ明字の心もあまのこころもあまのこころ
ゆりゆり

あまのこころもあまのこころもあまのこころもあまのこころ
と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

定置上野安養寺東明寺條々事

一當寺住持事本意命後者以門弟并姓可定住持
者也於并姓以後住持者雖為永代大惠之門徒等

各無私曲不憚權威成衆儀評定大惠之門徒之中
以當寺相應知法器量之仁可定住持又為當寺住持
者如本願置文在住他所不可成住持之補乎何況以
寺物於私用乎又以寺領田畠山林等任意不可讓與放
券于他人又縱雖定置住持若其人有不調子細
者可改替者也

一當寺勒行事佛殿三昧之勒行僧堂四時之坐禪
祖師供奉願忌等如當時勒行迄至後代不可有退
轉也

一當寺止住人事曰住持之人曰止住之僧非持衣鉢黑

衣之人者不可止住事

一當寺本尊聖教等事本尊聖教道具等不可
出寺內守注置目錄之旨若退院若於死去之期
一一可取渡于次住持之人矣

一當寺文書等事本願權律師賴還之讓狀置
文紛失日記次第本文書大專之時調置寺領
田畠山林等目錄祭王下知公判等又此置文
彼此相共時侍持并大專門徒之中故老知事付
相封可納寺庫寺用出來之時者共披封可披見
者也

右以前條々守定置之旨雖為永代不可違矣凡
當寺者本願賴暹雖企造宮令造立佛殿之後受
重病依難存命且為造暈且為興隆佛法以自筆
永仁五年二月一日以彼二箇寺議與大惠同三日
本願他界暈而大惠以三ヶ年之内方丈法堂庫
裏僧堂已數字之覺念造暈佛事勒行無退轉
然則上所載住持已下事又修理造營寺中非分
之沙汰等大惠門弟等無異曲成同心加衆儀
評定可全當寺之典行若不隨衆儀於皆定置
法之輩者不可為門徒及未流者也仍為後代置各件

執筆空度列

德治三年戊申六月廿日

安養寺自今以後條々禁制事

- 一塔頭結講莊嚴造營事
- 一現住僧衆以女人可為定量事
- 一号自食沙弥唱食其數多々事
- 一以五辛入寺内事
- 一列座藥酒放逸受用赤面事
- 一方丈寺中全髮童來臨夜宿事

一若在俗出家者出家聖道不捨本取任假僧形彼此兼任事

右所禁制七箇條中縱雖寡少亦不可違犯之狀如件

延慶三年三月十六日 注之

安養寺開山住持大惠在判

定置條々

大惠門徒中之寺菴弟子等自今以後自他取不可被取事

諸末寺菴初定開山住持之上者任其法脈可為住若檀那号其俗縁或号明契而於別所不可指住若其法孫令斷絶者乃乃々々以上本寺々々可有管領事至僧侶沙弥童行作邪佞惡行而師弟不和或自出或出院之後有以諸縁作師弟之競望之輩者於我門者不可領納於枉佞者事

右條々一針一草若有違犯之法孫者盡未來際可停止本寺并在々所々末寺菴之交接若以豪縁強作我門之交接者訟時公官可處盜犯之罪科者也仍為未代置文狀如件

正和元壬子年十月十八日

大惠判

年月日 寺院破壞基一カリ一以再興中

後起者乃助成之乞事者文

長松山安養寺再興勸進之狀

欽惟勢列管松山安養禪寺者佛通禪師楠卓
道場也師姓平氏相國清盛公后裔也初為台徒
凡國名八宗者粗涉其學最精密學多不發明兵
于時聖一國師初旺教外別傳之禪化師聞之發憤
而欲排世同答傲詰而伎倆清盡易服入室大事了
早返首於衆後任惠日山東福禪寺為第九世塔
號大慈菴無仗以天照皇太神宮者日本吾朝之
宗廟也無貴無賤無不崇敬斯故佛通禪師游履

勢列而及鷄鳴詣太神宮到于鳥居尸骸橫途師
解平巾結尸骸荷擔之去葬山陰念誦了直詣
神母而至叩當時白衣神人現於師前曰欲誠
和尚而尸骸橫途設一閱師直下透得而不染
生死豈拘滌淨去住自由脫體清淨心地玲瓏膽
之仰之既柔和尚大悲願刀頭護法護人之相連
濟渡利生之意聊又忘靈山付囑之宗者半要保
后人知佛神相見之感應而神誓曰神前諱穢雖
然恁麼入師道場沐其化者恕宥其穢以故這地
築禪刹而點茶椀往來參詣之衆而入如來清淨禪從然

門前宮之号明星茶屋到于今神宮參詣之貴賤喫茶
無不清其穢嗚呼和尚大慈大悲海深山高者也是
新養禪寺者殿堂窳々輪奐盡矣林殿規井々細素
須心仰其下風者不知幾千万矣噫哀哉月性歲運道
場荒敗狐兔為徃荆棘挽衣未泚之細子等雖欲再
興之一衣一鉢之外別無二時儲空送寒暑矣取
翼以十方檀越助緣再造安養道場神明加護佛
門增輝何幸加之哉各々破怪囊施与一紙半錢之
助縁修造切成可謂層寸雨天下者泰山雲者也
惟所乃源乃水乃羽林海原乃云安養乃とて大寺成

幸有開心と重二回原の法身子佛通禪師の像を
しめくたうもけくふ度くふ生と夜くふ心
の形とまがしてそんけくぬそんけくぬそんけくぬ
りりきどり奥港の人も何處りともいゆる人
す。おき高塔のくくく信の強りして酒をぬぬ
をかくぬりふ入ぬの境をぬくさくぬぬとも
あはく

ひよりのたの尾尾軒やそつりまふく入相のかみ

山田金銭

一天文之甲午年西り海神修自法夏夏多島の回月

こよひせしむ事成し小度舎の祖友称ししに成が
と争ひしは治田柳の領事一彦とて西川の政
道とて二用刻村と移移ゆ大剛乃者成改よりと
大婿とて堤上邸其友の志家龍^{リウ}神井並に市
本多山田大柳松桓 松村 龍家以下治田南
條川谷朝慈二鬼の者たとたつし一國年小打心
年^{リウ}とて^{リウ}ひ^{リウ}の^{リウ}小^{リウ}名^{リウ}勝^{リウ}具^{リウ}ら^{リウ}南^{リウ}京^{リウ}法^{リウ}院^{リウ}住
持^{リウ}也^{リウ}政^{リウ}り^{リウ}く^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}の^{リウ}老^{リウ}人^{リウ}也^{リウ}也^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と
大編を^{リウ}か^{リウ}く^{リウ}妙^{リウ}多^{リウ}末^{リウ}川^{リウ}原^{リウ}も^{リウ}あ^{リウ}ひ^{リウ}く^{リウ}し^{リウ}を^{リウ}務^{リウ}と^{リウ}ん^{リウ}と^{リウ}を
國^{リウ}司^{リウ}掣^{リウ}に^{リウ}移^{リウ}ふ^{リウ}を^{リウ}と^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}後^{リウ}に^{リウ}を^{リウ}移^{リウ}す^{リウ}

も^{リウ}し^{リウ}く^{リウ}つ^{リウ}た^{リウ}へ^{リウ}一^{リウ}言^{リウ}進^{リウ}で^{リウ}我^{リウ}と^{リウ}は^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}
乃^{リウ}皆^{リウ}殿^{リウ}軍^{リウ}し^{リウ}て^{リウ}計^{リウ}る^{リウ}者^{リウ}殿^{リウ}と^{リウ}志^{リウ}し^{リウ}後^{リウ}皆^{リウ}殿^{リウ}分
之^{リウ}京^{リウ}乃^{リウ}と^{リウ}也^{リウ}か^{リウ}く^{リウ}一^{リウ}言^{リウ}右^{リウ}神^{リウ}あり^{リウ}か^{リウ}け^{リウ}入^{リウ}御^{リウ}
守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}に^{リウ}勝^{リウ}十^{リウ}文^{リウ}と^{リウ}切^{リウ}く^{リウ}権^{リウ}大^{リウ}乃^{リウ}中^{リウ}に^{リウ}花^{リウ}入^{リウ}
死^{リウ}成^{リウ}り^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}に^{リウ}梅^{リウ}の^{リウ}法^{リウ}集^{リウ}社^{リウ}も^{リウ}也^{リウ}と^{リウ}一^{リウ}時^{リウ}に
焼^{リウ}失^{リウ}し^{リウ}ける^{リウ}城^{リウ}と^{リウ}初^{リウ}宿^{リウ}の^{リウ}身^{リウ}と^{リウ}して^{リウ}神^{リウ}法^{リウ}と^{リウ}也^{リウ}と^{リウ}也^{リウ}
守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}の^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}を^{リウ}先^{リウ}に^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}利
守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と
守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と
守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と^{リウ}も^{リウ}守^{リウ}治^{リウ}田^{リウ}と

奥夜を極そくたしてその教化は日長たりやうり
人々のお志の材ありの志もまこととて
くちらまてくちいれり界をのほくと建まき
と神古等とを接地例のまほ也偏能
ゆいそととまきしとておそる神前乃亦葉
中言ありんまは

まきぬまきまらんまきぬまきぬまきぬまきぬ
とまきぬまきぬまきぬまきぬまきぬまきぬ
まきぬまきぬまきぬまきぬまきぬまきぬ
まきぬまきぬまきぬまきぬまきぬまきぬ
まきぬまきぬまきぬまきぬまきぬまきぬ

とてくちらまてくちいれり界をのほくと建まき
とてくちらまてくちいれり界をのほくと建まき
とてくちらまてくちいれり界をのほくと建まき
とてくちらまてくちいれり界をのほくと建まき
とてくちらまてくちいれり界をのほくと建まき

一 三願 四神の神 大杉谷と大田の海合と高川の
上あり

多岐原神社延喜式神名帳見倭姫命定祝座地
三可麻奈胡神地亦御瀬社氏遷幸要畧田指川
上幸行は破流記速瀬有リ支サ尔時真奈胡神参相度奉
好其瀬平真奈胡御瀬号ナ豆御瀬平定給ル云

さあはなばなしくいなる初しはてしなく
傷く事なきふれ先之術の所所の計とめたる
形動お縛奥ふき隆如流川いふに厚附長御は系
且はついでと云はれよあ言ハ片成し軽さな多を
とや一各電社の起活文とて書物に世の書録
とてそさるも何ふの来下と云はれせぬ欲よとて
忠儀と云はれ強代と云はれしとて事誠は貧
然とてとてとて事とてとてとてとてとて
流れ流るるしとてとてとてとてとてとて
道とてとてとてとてとてとてとてとて

初めと云ふ可成とありとてとてとてとてとて
い前廻りとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
開じやとてとてとてとてとてとてとてとて
其流と云はれ一とてとてとてとてとてとてとて
の計らふ者方正曰ふ事よりとてとてとてとて
少めとてとてとてとてとてとてとてとてとて
一とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
の侍はとてとてとてとてとてとてとてとてとて
且放つ別乳とてとてとてとてとてとてとてとて

子任一唐貞元年よりと年天正四年と云ふ海鏡家
一尚玉の官邸に於てと云ふ一人の如く感亡せし
ありしをいふも奇なる右方入道より由人傳りて
海鏡の如く田舎より去りて砂浜を白と云ふ如
後神の如くと云ふ如く是男刑部少輔の
かゝりし事一と云ふ如く感亡せし
刑部少輔の如く我と云ふ如く
彼が感亡して父命物方只し行るを承りて
文中如く云ふ如く人共其事と云ふ如く
子利友と云ふ如く我老雁と云ふ如く
矢の如く感亡して人存常と云ふ如く
三と云ふ如く世と云ふ如くせん
深淵と云ふ如く身を没しと云ふ如く
人感亡せし如く一と云ふ如く其
我と云ふ如く彼利部少輔の如く
やと云ふ如くてと云ふ如く又
アと云ふ如く神と云ふ如く
受て四肢麻痺して死に
因余不足感と云ふ如く

天正四年三洲谷一抄事

天正四年壬午南郡東門院之八景也ぬの舎中入る
一 一のく仗乃事大なる及流のく甚奇懐き
此ら還信し中島具親と名あり大田心はる大橋
る小橋多のまゝふからと所いも定流の壬午と
中好さかしくい一橋を信くくしく云流情中流河
三流万景進し信平多所流くまゝりる大田亮河
みくまの新造と信平多所流くゆりり大田心
但る寺流流乃新宮多所流くまゝりる大田亮河
長付して新造流計りたり也流大寺流之廟宮志
信非くくくくくくくくくく

一村松 右信とも流村のりありく軍をり

舟具令
信具の流くくくくくくくくくく

一 相合乃橋 此中多景流と中流の流景の流橋をり

長八乃又おら乃橋くくくく流のりりりりりり
流くく流と云くくくくくくく

一 末景 此川の下乃流をりりりりりりりりりり
のりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

流
流くく流くく流くく流くく流くく流くく流くく

くくくくくく
くく

三河の末つりふのやうよたう向やふんあ
と家六つ川今も六やとわくあたのりて
いんかりん坊のまをそ水と流ゆるあ
みそをそあんとていそとていそと

一伊藤神社 延喜式神名帳に伊藤神社とあり

是ハ山後村の下ふの村を破村の事也事江川の
後宮乃事申す此れと神名秘書云云至仁天皇九五

年丙辰春三月伊勢百船度令王撥伊蘇國入

座即建神服織社令織太神之御衣麻績機殿神服

社是也後此社始在号伊蘇宮也 然後隨神誨造建神羅取丁巳年

冬十月甲子奉遷於辛鈴川上之後覓清麗高膏地天

和妙之機殿辛因興于辛鈴川上側令倭姫命居焉于時

天相機姫神令織太神和妙御衣依今處於若号磯宮

倭姫世記云從飯野高宮遷幸伊蘇宮令坐于時大

若子命問給汝此國名何自久百船度會國王撥伊蘇

國止自久御塩濱并社定奉是此宮坐天供奉御水在所

波御井國止号波于時倭姫命詔南山未見給波吉宮

所可有由詔天御宮所不見大若子命辛遣波之云

所磯之里海辺ありハありと水里ハ山後村の傍也

伊蘇宮ハ外物水如名集伊蘇宮とていそと

御とくは海邊とて乃村に住獲つる内をいひし人
津路の傍もまじき事也は後村のりよ平次河
の御事ふ極くりあこりあつたり

一 明野 砂奇何集しや未考

月清免以陸奥系の名跡ありは合外、前さゆき忌

一場田盤 田丸乃系

仲実助臣

つるき先中地とありて極くはつらあまの石堆りあり
砂奇は信濃尾根より信濃石倉の石倉といふ事を
せう物語のまじりあつたりしと十つうく石倉
たつとて心とつてかきけり思ふべき

津路百首

賛かきし指の史はみらたてし中地不精の子若きとて

成春長

とま信託を精見は乃事、自身親十その有つて常平
下向の後村史初よりまじりたるを精の成は並細
くおろしとりて非前よりまじりたるを能くお
まつらる事おろしとせしむべき

一 糸井神山 田丸乃系 坤行経一里田丸乃系

如外 持弓喜立りしと武士の女の神心正所たかしく

入道大塚大匠

一 鄧官院中修村押方在事し社をよと善日明神也
雄畧天竺古一年丹列りり豊受大社文とておろす

遷都しよる時を去郡に於て平尾の行馬差
二三月向くもつと成りしと離れしと云
延暦十六年「廿八日」同日郡同郷より京より
離宮院を水難より傷く同郡場田郡を相に
遷ししと云是名々の小保村と西より名
枋社十古所の田なり

此海人の子安と云はるるは阿波國高松府
多治見一流法師云今日高川水橋を渡りし小保田
と云はるるは名々の小保村と云はるるは
我々として離宮院前より先より多治見と云る

此後彼抄より忠海人今より来りしと云はるるは
一して五月朔の日幸矣と云り此後より備を
忠海人今より来りしと云はるるは此後より
備を此例して今より豊受と云はるるは
先前此のやかの川より出くも其後より此の
神懸よりそのうと云はるるは此後より
此のうと云はるるは此後より此のうと云はるるは
古也古記より五月より此のうと云はるるは
大川より此のうと云はるるは

一 枋田の存存國より名々の小保乃河は中経より名

義教

抄第... 後醍醐天皇
之旨言... 後鳥羽天皇
所居方... 後深草天皇

一 宣旨 曰凡... 後醍醐天皇

或能... 後醍醐天皇

太... 後... 後醍醐天皇

新撰

出... 後醍醐天皇

任

伊... 後醍醐天皇

一... 後醍醐天皇

新撰...

又... 後醍醐天皇

人のまゝに思ふをまゝや

神後すも豊前川の古河原の移り 移り 長門の移り 移り
け川とていふ下河原 下河原 移り 移り

おととあつひ昔は常とて思ふ 昔は常とて思ふ 長門の移り 長門の移り

一 度金川 金川 なるは乃古川の急な金川有記云八雲所移
勅撰名 勅撰名 集多 集多 乃古川と云ふり 乃古川と云ふり 是乃古川の
なりと云ふ なりと云ふ 乃古川の石をて 乃古川の石をて しく しく 乃古川
と云ふ と云ふ 乃古川なる 乃古川なる 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川
異説 異説 たり たり 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

百葉十二 乃古川乃古川の辺 乃古川乃古川の辺 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

御鎮座本記曰 御鎮座本記曰 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川 乃古川

長記曰忌穗海人會（能神也）取年奠備集神前
 以其例今五月三日豐受宮人捧持御細出宮
 川取年奠有能每々雨降由在古記於點者取掃
 守氏人備奉（田）大川邊（於）古老傳阿部川原止曰
 云今云此神事年々有享云云延喜式曰三
 取祭月（六月九月）十六日齋王奉度會宮（禊）
 度會川神宮雜事曰長元八年九月御祭依
 例齊内親王奉宮之門度會川東西岸洗溢
 流爰依（件）洪水恐留於離宮院（宮川西湯田郡）以
 同廿一日二宮參宮（給）云宮川者二宮雜宮

云のりし者神祇本源曰云云大治二年六月廿五日
 宣下為度會河堤（方）獲也云云云々又云云々大王神由
 一也山田江野地云々云々（を）神也云々云々
 神名抄云々云々集等大同文云云神名抄云々
 度會川とらるる高川のすし江成云々云々
 毎年法々云々神宮雜事曰元正天皇靈龜二
 年八月十六日大風洪水仍豐受神之瑞（塩）并御
 門一宇流散但件水御正殿之許一丈際專（不）
 流奇（天土下）入旱甚神妙也云云同書曰清和天
 皇真觀十五年八月十三日大風洪水間豐受

ぬりへんは及定ら大古チリノヤ程林と所へあしれせりといふ
そ然と神ありしそい推しこ色ゆり也といふ

一 右宿望 外所故少遊

二河のりりいまるまをれと相まをりて宿望の望

在り宿望行望

三河やま新なる出くまと出まかけしる宿望の望

法能能國

多能まわくま望のまをれまをりて次高河ちりま望の乃

民りり約しりいほ地行のわまほ地乃清りまをりて

そま望の乃高河の河まをりてま望のまをりてま望の

ま望のまをりてま望のまをりてま望のまをりてま望の

ま望のまをりてま望のまをりてま望のまをりてま望の

ま望のまをりてま望のまをりてま望のまをりてま望の
ま望のまをりてま望のまをりてま望のまをりてま望の
ま望のまをりてま望のまをりてま望のまをりてま望の

幾代と相まをりて宿望の望

ま望のまをりて

と海りてま望のまをりて宿望の望

到志柱大酒言原高世神別詞ま望の望

也といふ又同一ま望の望

春海まをりて宿望の望

ま望のまをりて

砂野も清りて宿望の望

いふまをりて宿望の望

ま望のまをりて宿望の望

也凡父より向く言ふ事也故拒く方死一ヶ所合戦と
と云ふ父方留る所より打負てと云ふ事と云

度會郡長為城攻事

一長為郡南天正四年乃長信雅の長守部乃
任人高村新左衛門の地之方長守部高守部
介一長信雅の地之方長守部高守部
攻方一長信雅の地之方長守部高守部
之鬼の地之方長守部高守部
信雅の地之方長守部高守部
里依く方の新左衛門の地之方長守部高守部

大内公也るも神向の事也此計はと云

一蓮随寺 亦梅香と云 大の岩寺乃後深寺也高上寺
乃書梅香後尼乃所也と云云守の地之方長守部
と二代又蓮華谷と信と云

一正法寺 山田河内二信と云也也此寺觀音遍海家
信より大同二年より田村氏建立と云云此寺は河内

一教皇山蓮華寺信と云云高王輔親郷の建立と云云此寺
久志も此寺の地と云云此寺正觀音信後高信所也
目よりと云云此寺の寺也

皆今も傳ふ事と云云蓮華寺の地之方長守部高守部

本寺釋迦乃像長七尺五寸西ノ大師を觀音菩薩
守之社を

一 三寶堂 尚法中ノ有世本寺ノ一ノ可なりと
西ノ寺ノ不動明王ノ像を真身云々云

一 真觀心寶性寺 仁徳巡禮札所七番目也むる
十一面觀音也云々

一 月鏡の裏の卜成つちのふまげ花あかす舞あま
一 歌山

一 福山 威徳寺に上乃少く忠庵有
別所云々 福山の上ノ者

京都屋渡 別所云々乃舟を福山殿也中或云々古

一 親五輪 京都屋渡白洲

二 黒 親五輪の上ノ所

屏風堂 二黒ノ上ノ所

中乃作 屏風堂ノ東ノ所

右書渡 福山ノ南ノ所

卯木島 寺後ノ奥ノ所

花叢 中ノ作ノ下ノ所

一 内外宮 山崎 信よりあり云々云々云

内ノ天沼尾殿事々ありありの条下云々西云

その間七葉一野原とて七葉の内宮とて生れたる宮也
五年丙辰歲度會於宇治郡中鈴川とて亦なる
是より雄略天皇廿二年丙午歲迄八葉廿二年始簡
ら内宮とすともてて道行をいふも此の傳の後
内宮少針とていふも乃其の傳なりとていふなり

神名秘書云雄略天皇即位廿二年戊午年豐受
太神度會山田原亦鎮座之後乃曰二所太神宮とて是
内宮外宮とて豐受太神と曰く亦此の傳なりと
其後内宮中宮とすなりとていふなり又伊豫國風土
記宇治村五十鈴川上造御宮社奉祀太神曰以宇治

郡為内郷也今以宇治二字為郷名とて世風を記し
元明天皇御宇和銅五年壬紀傳也とて天皇御宇
亦鎮座の目宇治と内宮とすなりとていふなり
さふいありとて一葉に比して八元明とい七百餘なり
雄略より一葉に比して一葉に比して一葉に比して
是より亦も内宮の中宮とすなりとていふなり
事なりとて傳をたしとていふなりとていふなり
内宮の文とて亦なりとていふなりとていふなり
又神名秘書云村上天皇御宇天皇公節之時太神
者與坐之故号内宮度會宮外坐之故申之宮

下百民よむらとある言の松育りて地はとらふ事

新古今

神風や玉指のそびらさく内は地をさるる神は

新古今

神風や内は地をさるる神は

と世を月乃光の神はやひて是神の内かとも

か神は乃千本の内かひか事天指をいひ同くは神の神は

か神は乃千本の宿る暮る小記曰千行松水大之天地之

象也故則曰天之智義也松者仰天以足開は新定

月天之一水利萬品級也と云松は本神殿と云三

つてうら遠くたるとは甲は神風のとて一言つ

松は乃千本の宿る暮る小記曰千行松水大之天地之

象也故則曰天之智義也松者仰天以足開は新定

月天之一水利萬品級也と云松は本神殿と云三

つてうら遠くたるとは甲は神風のとて一言つ

松は乃千本の宿る暮る小記曰千行松水大之天地之

象也故則曰天之智義也松者仰天以足開は新定

月天之一水利萬品級也と云松は本神殿と云三

つてうら遠くたるとは甲は神風のとて一言つ

松は乃千本の宿る暮る小記曰千行松水大之天地之

象也故則曰天之智義也松者仰天以足開は新定

月天之一水利萬品級也と云松は本神殿と云三

つてうら遠くたるとは甲は神風のとて一言つ

松は乃千本の宿る暮る小記曰千行松水大之天地之

とくもそしつゝあはれなきと編成の心もあはれ
ほつては社殿をかほせしむるに唯徳院の行ふは
七人つゝなりの事久く二年たへんたふ成りて也

新編

林とてはつたふてなほしむるをたつたは人

菅高成

是八人の時はそなりの社殿の石筆として社殿のあり
むの初なる物所なりと事方におもはるゝ事目物使の
石筆也とらた人といひ内言は社殿とつた事也亦
その内言に余の院の法にそなへたる中より五人十
人とてしつたは也一の社殿とて長石とて云ふが事也

是月二の社殿と一の社殿とのわけをともなはしむる例
なりとてあま遷すの事所々の院の事とも今用は
所とて天武天皇の即位の年九りなり物定是九年
とてしつたは也一の社殿とて二月とてあまの内言に
た内言の式とてあまの事正遷すの儀成とて所
ともなはしむる事也二天武天皇の社殿とて
所とてしつたは也由氣とて社殿とては事不
しつたはなり社殿とては福徳の所事なりと世たり
事とてしつたはなりと事也の初なる事とて事なり
我代は是をそなりの事とて是は後とて我代は是なり

却ら神道義激しやうしうの人心と懐懐しめる道法
原の爲る一言法後と云はれ國を成るは法よ信者
かしく物とけそを物成はつるをたうのたうんあ
二ある初言をくいひくやあしく法んか
一山田又爲ると云 別の中なる神道の可也

人家九千軒 倉庫八千石 乃々たり 其の善田
其継橋の々として 此市店の内なり

山田所は村々、高向中川家も成社 大湊神社なる所
竹ノ鼻 阿部 早瀬 道村 小舟 田尾 下野 新開
二見 店 西村 と一區

別玉の内 且鑄玉の遠近也 あまのこま風流を 所社十六

府の内 國見社 大國神社 二社の十四府の内 遠近なり
東社 四千七社の内 此御門と下御井と 社名 神宮
其社のか 四千七社と云 遠近なり也

外宮 山内系 雄略天皇二十二年 御宇 御宇
明暦二年 申年 一千七百七十九年 内宮 鎮座

東相殿

天津彦火瓊杵尊 天孫也

豊受皇太神宮

國常立尊 天神之始祖

亦天御中主尊

西相殿

天照屋敷命

天ノ太玉命

豊受皇太神ハ天神七代乃之祖也
あまつかみつらぬきとて
豊受皇太神ハ天神七代乃之祖也
あまつかみつらぬきとて
豊受皇太神ハ天神七代乃之祖也
あまつかみつらぬきとて

丹波國与佐郡真井
雄略天皇在二歳
天降みふ由也
是と云々神七代
丹波國与佐郡真井
雄略天皇在二歳
天降みふ由也
是と云々神七代

惟命天馬左神
日牟牟命
降りて天乃山
坐りて豊受
神皇正統記
皇極經世一
天皇御宇
又それ

のいふ言はず三年蓋して惟畧天を去る○二十日朔の
天照大神の所なりしと我天乃小あよひませし
あつく天乃あゆくこと一あゆまきん念行の所所解
し易しきましあゆむを神宮の國と信のし見ん乃
ま井乃あゆむ所なりし道なり八年止あ乃疾たまふ
量量とを去神と昔の事をも同じくもまをたれし
くふ所乃あゆむこと一あゆむ秋七り七り大信命とて
余信命とま井あゆむ信宮の國と遷りしとまの信命と
しとまの信命と天相の信命と平尾乃疾命とて
月神とまの信命と神天と也昔天乃玉神とて神事
成

是と今乃世の事なりしと今乃世の事なりしと
つと山田乃し所遷宮なりお教りしと信の神乃
白尾乃天照大神根命天を玉神是なり天照大神
根命乃神事なり今乃世の事なりしと今乃世の事なりしと
小言書
そのうや神事なりしと今乃世の事なりしと
其つとまの信命とまの信命の事なりしと今乃世の事なりしと
本神事なりしと今乃世の事なりしと今乃世の事なりしと
かまきりしと今乃世の事なりしと今乃世の事なりしと
一度今言是しと今乃世の事なりしと今乃世の事なりしと
神事秘書曰度會者大國玉神

奉迎之時以梓弓為橋而度焉愛大國玉神
佐々良比賣來迎相土橋卿也木村自尔
度會云焉因以為名也云々此大玉乃社繼橋
卿之社乃尾張一乃也云々大國之谷と
云也云々乃迎之乃り印之の橋社十之府の中也と
云々又多傳物傳中云云云々此皆云々河
乃りし所社云々と繼橋とて通すし尚也時大
國玉令と傳云々此社と傳云々此傳云々
今郡と云々此社と傳云々此傳云々
此社風と傳云々此社と傳云々此傳云々

云々此乃名云々傳云々此社と傳云々此傳云々
此社と傳云々此社と傳云々此傳云々
云々此社の中府云々此社と傳云々此傳云々
一此の云々云々此社と傳云々此傳云々
之御宮御本雲宮乃令云々此社と傳云々此傳云々
此社遷坐此篇度會郡乃令宮宮座相殿座之坐云
外宮の相殿ハ何處云々此社と傳云々此傳云々
之座云々此社と傳云々此社と傳云々此傳云々
令携揚云々此社と傳云々此社と傳云々此傳云々
此社と傳云々此社と傳云々此社と傳云々此傳云々

又延喜式第四云度會宮四座有度會郡名
木御山田原去太神宮西七里一河曲受太神一座
相殿神三座云又古事記曰宇氣神此者坐外
宮之度會神者也云議式帳云等由氣太神宮
事今福度會在度會郡治木御山田原村云是為
乃外代之宮等云云云云云云云云云云云云云云
の所事又延喜式及云云云云云云云云云云云云
賜く初吉の姓今山田原也是也云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
か云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
宮と事書云云云云云云云云云云云云云云云云
倭原命為御杖真奉於天照太神是鎮坐於磯
城巖榎木而祀之然後隨神護取丁巳年八月十日
甲子遷奉于俣勢四度會宮云云是を内宮乃所
事なり云云云云云云云云云云云云云云云云云
乃云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云云云

沙金流あり〜〜海原存まよとせむらひの影印も此
沙事海魚〜〜陸原前修月文も存まよとつと金
めよの〜難るゝる層も〜壁り神紙本源名も集
山守小天照皇太神と二宮の通稱也とよふもこれ
唯ま魚〜

建保
此の世も先〜〜の世も海原の神といつと存まよ
沙奇の修〜大津家の所存所存も存まよと云

勅撰名所長歌

度會乃齊宮從神風雷伴吹惑之天雲平目之日毛不覓
常闇覆賜而定之水秘之國平神隨大敷座而八隅知之

ワカヲホキミシ
吾大王之天下アマノコト下界是又存まよの宮小入り
宮り〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜
と〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜
八雲所被勅撰名所長歌平目乃由玉乃名所
〜度會乃齊宮從神風雷伴吹惑之天雲平目之日毛不覓
〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜

一印五社名所長歌

今乃〜あまのわの所〜の橋〜の橋〜の橋〜
〜の橋〜の橋〜の橋〜の橋〜の橋〜
沙所〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜のりき〜

橋の下、城豊川と云ふり、豊美川と云ふ、三河川一乃
多也、瑞籬の所、門一、一の多、此の橋と云ふ、
九つ、さう、人、あ、う、う、

一、一、多、此、橋、の、ゆ、り、と、鳥、居、り、前、瓦、の、音、に
車、宿、り、今、や、な、り、東、の、道、有、苗、祓、の、地、と、り、
南、の、所、ハ、高、林、也、行、東、河、ハ、内、方、の、道、を、り
池、の、系、と、苗、祓、の、社、を、

一、二、カ、鳥、居、少、前、は、乃、道、方、と、奥、に、相、社、と、云、者、石
流、り、今、り、多、也、り、ゆ、り、と、河、邊、有、り、と、り、
一、た、り、九、十、殿、と、り、一、五、十、殿、と、り、一、殿、を、り

一、^{おまん}主、神、^{つら}御、辰、を、ち、な、り、沙、町、と、正、殿、ハ、古、よ
ゆ、り、た、り、ハ、水、乃、所、門、た、る、り、乃、多、の、河、邊、河、正、殿
の、り、ち、な、り、玉、串、新、石、組、あ、り、た、り、後、所、河、地、を、復
り、と、多、所、の、流、人、も、水、と、流、り、

一、河、川、地、無、文、武、も、毫、毫、廣、電、心、何、川、地、等、此、社、系
也、り、是、を、り、ゆ、り、又、每、王、候、殿、ハ、河、川、地、乃、迎、り、
か、ま、り、所、の、流、乃、河、地、の、事、を、云、

一、素、と、年、せ、れ、と、地、代、の、高、山、を、長、文、た、る、り、
元、長、と、豊、受、の、所、前、は、流、行、の、川、を、な、り、ハ、^{おん}お、也、^{おん}お、也、
と、神、前、の、池、の、事、を、成、魚、と、河、川、の、事、を、流、乃、地

あまきん此名如命と云るをりき林前河川の
流りしと云ひ似たり又神祇本源外宮御井
之下曰御炊殿往還間道一丈橋一十五丈黒橋
此月毎修理掃淨雑人等不通志慎敬仕奉る
註曰昔河也黒木橋有今田也堤也無橋也 事記云高倉少乃西へ有る

山として有り其の天也橋井として河解村乃有
有力者云人の道橋一丈丈里少橋と云雑
人少力ハ何もたえく橋がそのまじくたり
と云ふと後何たりするの事河解村といふなり
今河解村人け橋をその橋又在河解村と云有説者

神祇百首

新河乃橋柱を名に今も只一也也や云長
吉乃下植小川の橋朽くを治しむと云
船りき名を今も道中を志事記に傳へり
式部位階有夫はその山鎮所の時植小川の
河解村より一はよりけ橋を再修る橋と云は橋乃
圓の奇形を今も治りし事記に式説す也
河川内を渡りて云わその山に河川内
て只一事を名を事なり河川内は
叶はして河と名を河川と云也

清吉乃河川の物も河川内
山内

奇林（？）我（？）は二之角（？）柏（？）と云ふ之氣（？）かたてとも也（？）は乃（？）
 大津（？）多（？）あまて二之角（？）柏（？）と云ふては事（？）もさそとた（？）
 二之角（？）を叶（？）ふた思（？）ひ叶（？）ぬし柏（？）を川（？）と云ふ
 神（？）を色（？）て候（？）なり
 中細言（？）後家（？）意（？）十者（？）下達（？）意（？）

神（？）風（？）也（？）之角（？）柏（？）と云ふ事（？）向（？）て是（？）川（？）と云ふ神（？）を色（？）て候（？）なり（？）
（？）河川（？）みらと云ふ神（？）も色（？）て候（？）なり（？）
（？）せきもあは海（？）の川（？）に子（？）をさそと云ふ流（？）き（？）なり（？）
（？）後人（？）と云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）
（？）あはゆ（？）なり（？）と云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）
 風宮（？）余（？）下風（？）神（？）祭（？）名（？）曰（？）柏流（？）也（？）豊年（？）則（？）浮流（？）通（？）出（？）

年（？）則（？）沉（？）覆（？）損（？）云（？）風（？）あり（？）川（？）一（？）御（？）也（？）の川（？）知（？）風（？）
 之のト（？）われハ（？）水（？）あり（？）也（？）事（？）成（？）魚（？）一（？）又（？）之角（？）柏（？）の奇（？）
 づきも子（？）みと云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）

輔親

みと云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）柏（？）と云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）
 之の氣（？）と云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）
 柏（？）と云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）

一（？）乃（？）多（？）あまて二之角（？）柏（？）と云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）
 一（？）同（？）傍（？）危（？）の洋（？）所（？）を（？）が（？）枝（？）枝（？）の（？）あ（？）り（？）と云（？）佛（？）法（？）下（？）
 乃（？）多（？）あまて二之角（？）柏（？）と云ふ事（？）のあはゆ（？）なり（？）

所_レもあ_レば收_レ初_レ友_レ乃_レ内_レも儒_レをそ_レつ_レ者_レは社
道_レ儒_レ道_レの如_レ一_レ理_レを_レつ_レて為_レ道_レ儒_レ陽_レ性_レ理_レの相_レ似
此_レも亦_レも_レつ_レて并_レ合_レ一_レ佛_レ道_レを_レ視_レる_レ又_レ佛_レ道_レを_レ子
初_レの_レ彼_レ田_レの_レ言_レ、_レ令_レ胎_レ為_レ初_レの_レ大_レ日_レを_レつ_レて_レ儒
と_レ視_レる_レの_レも_レつ_レて_レ其_レ是_レの_レ義_レ也_レ夫_レれ_レつ_レて_レ人_レや_レ不_レ良
凡_レ情_レの_レ学_レと_レ理_レを_レつ_レて_レ人_レや_レ唯_レ之_レ道_レと_レ稱_レ若_レと
い_レへ_レ人_レ倫_レ乃_レ乃_レを_レつ_レて_レ我_レ執_レる_レ也_レ至_レ理_レと
か_レく_レ少_レ多_レ、_レ至_レ理_レと_レ如_レく_レ唯_レ天_レ比_レ乃_レ中_レと_レん_レ然_レ地_レ實_レ者
て_レ是_レ以_レ社_レと_レつ_レて_レ明_レ徳_レと_レつ_レて_レ佛_レ性_レと_レつ_レて_レあ_レりし
神_レ道_レ云_レ傳_レ其_レ本_レ心_レ皆_レ令_レ得_レ大_レ道_レ又_レ云_レ心_レ神_レ明_レ舍

儒_レ道_レ虚_レ靈_レ不_レ昧_レ而_レ具_レ衆_レ理_レ應_レ萬_レ事_レ又_レ道_レ不_レ遠_レ人
不_レ可_レ以_レ為_レ道_レ佛_レ經_レ我_レ身_レ即_レ大_レ日_レの_レ中_レと_レん_レ之_レ道_レ乃
至_レ理_レと_レつ_レて_レ始_レ得_レ也_レ一_レ致_レと_レや_レあ_レん_レと_レつ_レて_レは_レ偏_レ依
の_レ偏_レ依_レた_レる_レ之_レ智_レと_レた_レり_レ社_レは_レ儒_レと_レ偏_レ依_レ皆_レ愛_レあ
ら_レず_レや_レ至_レ是_レ海_レ儒_レと_レつ_レて_レ佛_レ性_レを_レつ_レて_レも_レつ_レて_レは_レハ
を_レつ_レて_レも_レつ_レて_レも_レり_レの_レ世_レ活_レた_レる_レハ_レ至_レ是_レ以_レ佛_レ性_レ
か_レく_レ也_レ古_レた_レる_レ乃_レ宗_レ教_レ儒_レ乃_レ乃_レ事_レと_レた_レる_レ今_レも_レつ_レて_レ
捨_レた_レる_レハ_レ人_レ倫_レの_レ言_レを_レ忘_レる_レの_レ如_レく_レ國_レ家
乃_レ亂_レと_レ成_レ也_レ又_レ至_レ是_レ天_レ宮_レ凡_レ神_レを_レも_レつ_レて_レ社_レ
高_レと_レた_レ代_レ大_レり_レの_レ如_レく_レ亦_レと_レ亦_レ行_レ也_レ一_レ竹_レと_レつ_レて_レも_レつ_レて_レも_レ

社方令をくしりし事等佛法宗教すし由に故
に社長の格を移す事しつて西の向ん
より社を移しそのまゝの古くから
瑞の社遺体法をよその格をく次社を其
内成式よりあるか或は移す所也
社をくしりし事等佛法宗教すし由に故
に社長の格を移す事しつて西の向ん
より社を移しそのまゝの古くから
瑞の社遺体法をよその格をく次社を其
内成式よりあるか或は移す所也

一之乃馬也 是より正鶴門をくしりし事等
社方令をくしりし事等佛法宗教すし由に故
に社長の格を移す事しつて西の向ん
より社を移しそのまゝの古くから
瑞の社遺体法をよその格をく次社を其
内成式よりあるか或は移す所也

乃所門 瑞の社遺体法をよその格をく次社を其
内成式よりあるか或は移す所也
一 小名居と云者社を移す所也
一 右社と云者社を移す所也
一 玉串乃所門者社を移す所也
一 瑞の社遺体法をよその格をく次社を其
内成式よりあるか或は移す所也
一 本社南向昔受大神也 國常立と云者
相殿と云者東邊と云者西天思殿根と云者
命と云者社を移す所也
一 社方令をくしりし事等佛法宗教すし由に故
に社長の格を移す事しつて西の向ん
より社を移しそのまゝの古くから
瑞の社遺体法をよその格をく次社を其
内成式よりあるか或は移す所也

たうり二十年毎に遷宮故古殿ありし東東西
定り

一宮白河地方八重井河門よりたうり西出河門
より白河川の玉座河門乃東の河

一宇須乃野社 二草奈岐社 三大間國生社

四國見社延北御門西豊川ヨリ 五園社 六大河内社

七田上大水社北ニマリ 八志等義社 九清野井庭

十高河原社 十一河原瀬社 十二川原大社

十三小俣社 十四御野食社 十五宮崎氏社

世門の幣帛殿正殿乃乾角なり錦河内大

云今乃信氏神と云

類聚本源云宮崎氏社者坐度會郡宮崎度會神
主氏遠祖也天牟羅雲命也云云或天村雲命共書

之度會神主氏遠祖也一名天二上命云又名後

小橋命云天御中主尊十二世孫也天照皇太神

天孫二柱神天降坐時御前立天奉仕給神也即

外宮末社四十七前内也南向一社左西向三社

右東向三社有是皆度會氏之先祖之命達

配祭也

一社也
松風や小島は船屋ありたうり河内河門より
西出河門

一十六北御門社 今世の人世よりより善信此正
 此は妙と移後の内社有妙移り瑞籬の折門と
 石半ありあり有神名秘書云一名曰若雷神靈一
 形懸座加茂社同躰神座也
 一十七上御井 國見社乃前と爲て坪乃谷と有
 一十八下御井 是八土乃宮と爲て坪乃谷と有
 是天上乃志穂井と爲て坪乃谷と爲て大田奉侍
 曰孫尊天降坐時天村雲命并忍詔食國
 之水波末熟荒水在利故御祖天御中主神
 之御許參上此田言久來止詔即天村雲

命參登天孫之御祖之天照太神天御中主之
 御前皇御孫之申又止宣夏并子細申上
 時御祖天照皇太神天御中主皇太神正
 哉吾勝尊神曾岐高皇神曾神皇尊神議詔
 久雜奉年改者行奉下度思問爾曾天參登
 來止詔天天忍石乃長井乃水并取八盛誨給久此
 持下天皇太神乃御饌八盛獻天遺水波天忍
 石水止術云天食國乃水灌和天朝夕御饌奉
 獻又御伴天降奉仕五伴神三十二神八十友
 于穗宮乃御井定崇居吾奉仕矣自以降但

天眞名丹... 神八神... 天二上令... 後小橋... 御田... 立根倉社

- 一 依奈社
- 一 須磨留賣社
- 一 伊加利社
- 一 野依川田社
- 一 赤崎
- 一 梅懸社
- 一 伊加人社
- 一 箕曲氏
- 一 山末社
- 一 鹽屋社
- 一 世四
- 一 世五 高神社
- 一 世七 大國王社
- 一 世八 宇須野社

信濃國諏方明神是也大己貴命子建御名方命也

此二社八苗根乃池乃東乃山上イナ

一後所乃移也
右帳之月鏡座伊弉諾尊洗右服因以生号曰豐受

一土宮三座
瑞籬乃所也
与高宮中間東白座神名帳大土御祀神社

一大年神一座

一宇迦魂神一座素戔嗚子也同有之神而其所載者別也混合

一土御神一座神名秘書云速須佐之男命聚天山

津見之女名大市比貴子大年神次宇迦之魂神

而大年神生大土神亦曰土之御祖神是也大治

三年六月宮符改社号为宮預祈年月次神嘗

奈幣也宮河堤為守護神也保延元年遷宮之時

造宮使親幸造之

一古事記云高乃之妻(高乃)左服以氏名者官高乃妻

因乃下河井社右服以名者左服以今名乃社者

此等(高乃)之妻(高乃)左服以氏名者官高乃妻

而乃(高乃)之妻(高乃)左服以氏名者官高乃妻

一名賀宮一座 瑞籬乃所也
神若秘書云太神宮南宮大

神乃別之乃(高乃)之妻(高乃)左服以氏名者官高乃妻

靈御於鏡座伊弉諾尊洗右服因以生号曰豐受

荒魂亦伴吹片主神是也
高乃(高乃)之妻(高乃)左服以氏名者官高乃妻

の麓に於て深秘威威の河津神社と申すありける
と傳へしを世に傳へし高の美を譽人の言はるるに
弘法大師の寄進也といふ事あり其の事と
あり能く行者の靈化を言はる事と行も
ともや多信託を云ふ事ありて一寺に成るる
と云ふ事ありて一寺あり古傳は弘法大師の
と云ふ也當ふに乃りて事と云ふ事所神より
管内社と大社と云ふ事ありて一寺あり物及の
と云ふ事ありて一社ありて一寺あり又
乃りて一寺ありて一寺ありて一寺あり

仙居を云ふ事ありて一寺ありて一寺あり
人の所より云ふ事ありて一寺ありて一寺あり
乃りて一寺ありて一寺ありて一寺あり
道土方術を云ふ事ありて一寺ありて一寺あり
と云ふ事ありて一寺ありて一寺あり
の極覺の事ありて一寺ありて一寺あり
事と云ふ事ありて一寺ありて一寺あり
一寺ありて一寺ありて一寺あり
て一寺ありて一寺ありて一寺あり
とも云ふ事ありて一寺ありて一寺あり

似て河津にて明友ふ澤く本傍一りの乃相心可
るりて色成りしものかこのころのあはれ連
後とて多し原と云

一風神社 神祇本源云在神宮南土宮東但南向
座云 神若秘書云風神社者門宮風神与躰也
取謂欲念珠風不吹穠穠滋登故有此祭云云
舊記云山谷水变成井水没潤苗稼得甚全稔故
有風神祭名云柏流也豊年則流流過凶年則沉
覆換云四月七日祭之云瑞籬門より百二十間
有

一土乃宮流前より風のふくまはれし御所あり
さくし岩の人の道行り又風のふくまはれし角殿あり
今よりあり

一物より御所後後河津中流所の方面より正
殿より河津御所殿と殿のより河津殿有
小築後と云此より殿舎あり

一御器御倉あり 神若秘書調御倉神有西北角
座也大御氣都賣神 一名大冨都賣命 一名保食神 屋船神
豊字加能賣神一座 稲霊神 一名宇加神 伊弉諾伊弉册尊
子大冨比賣神 亦名保食神 座神 祇宮座膳神是也

又倭姬命御代神服機殿祝祭之名号三狐神是也
号齊内親王專女神此縁也

一右ノ河段印河倉方同河溢河倉是也

一同河酒殿行以石神為正正躰也酒殿造替并

修補之時奉遷調御倉也神名秘書云伊弉諾伊

弉冉尊子和久産巢日神豊宇賀能責神亦名姪

娥亦曰早女自月天降天喜為醜酒飲一杯吉乃病除

之其杯之直千金財寶積東送之今号神酒者即此縁也丹波

國与謝郡北治山項有其名号麻此處居神也同行

野郡祭具同神也

一御廳殿 大道へ出り新し有

一子良宿館 大道のふもと砂所のちかきとてはま

のちかきと云はれ北河門社へとてま士六ありなり

一河邊橋々々南の河門のふもとあり北橋をたはる

一式内梳社 十八座

一月夜見社 山の言後やまの河の事凡木中へ河

ちかきと云はれ新の別々の内也神祇本源云

社記云坐沼木御山田村又曰在神宮北四堀也内宮中

村有之神名秘書曰准土宮之喜例依神事之増

加定内宮可被増作寶殿寸法之由承元四年三月昔

次第上奏之如同年五月廿二日依請被下宣旨被
授宮号了云建曆元年正迁宮之時造宮使神祇權少
祐親統以牲物造進之准内宮造建小殿也神名内宮
与同躰神也

一草岩伎社 沼木郷山田村大間の社乃西有標釵と
伏す也云々

神祇百首 草岩伎の社と推してあるは此の事也と云ふれり

一大間四社 山の宮中乃おより信まぢらるる也
云々の事の中二社有大なり子令しあり子令
しと云々東大間西大間と云々魚一向し陽羅の中也

一彦會四御社 沼木つ山より大り別余あり彦會
惣か及建与東令正殿の乾典其の祀也内宮ハ
中村より

一大國王比賣社 建橋神宮と云神乃南の尾崎有
大を者子信く良娘令也内宮ありて
沼木つ山より云々

一田上大水社 建橋神宮よりありて東の田と云ふ大水也
大神主小夏と云ふ靈と云ふ丸と云ふ是也

一志苦義社 沼木つ山勝村よりありて野井庭村亦
神乃懸社と云名大明神也

一 大河内社 沼本郷山懐村より大いなる神

一 川原大社 善面郷向村より川の神水の神字之津社
同五位の由より所行り

一 清野井庭社 沼本向村大河社より草野
水守也

一 高河原社 一名川原坐國生神在沼本郷山向村
月鏡宮東也 神名秘書云調御倉宇賀吉許尊

形酒殿軍陀利夜又神寶瓶土宮宇賀神玉瑠
壺大田命各式御倉神或酒殿神或大土祖土宮
坐或云國生神と云々ありとの物も月鏡乃東

よりの川原の社の外あり也

一 川原大社 善面郷向村川原社向字塩坪向也澤姫神
一 山末社 池田郷字山末河内尾社乃南小梨谷
大山津原水守也

一 宇須乃野社 高向郷字向村之社有豊年祭
奉祀月之御法美多麻社也同玉垣内多祭一乃草
神社と向也 神名秘書云五穀靈神宇須
命金鏡日天月天光精曲玉天以屋希笏之上三種
靈物外宮相殿坐

一 中俣社 湯田中俣村より宇須乃野社一各福矣明神

一御饗神社 在箕曲郷大井之社内也水戸神名速秋
津日子神亦水戸御饗食都神

一山田原外宮は古本を括く云ふは後成徳
云々受のまは有信及山田原を以ての帝中
と山田原を以て難うとす一とあるは神名あり
と山田原を以て山田村とす一とや山田の山田原
山田の山田原を以て山田村とす一と云

風雅 夕日山田原を以て後成徳の山田原を以て
所集 友の山田原を以て山田原の山田原を以て
山田原の山田原を以て山田原の山田原を以て
山田原の山田原を以て山田原の山田原を以て

一天岩戸 外宮正殿より十八町あり

風古記説く神武天皇乃天日別命勅成清く其の
國を平まらば一山田原を以て神武國成候一
て指さすふ天日別命は皇命の由成山田原を以て
作られたる山田原を以て風古記に一山田原を以て
云々云々天日別命を以て山田原を以て一と云
あり一と云くけむと山田原を以て山田原を以て
一山田原の山田原の山田原を以て山田原を以て
則山田原を以て山田原を以て山田原を以て山田原
世記云山田原を以て山田原を以て山田原を以て山田原

又不可傳事者、く何物なる侍止の處、石堂と傳つて
何多む大圓玉神と云ふ處あり、あつとも也、神宮雜記
高倉石室則大日別命、大己貴國玉神靈也、と云
別是今の天岩、之乃御事也、砂山、成る侍止、高倉山
と云ふ也、石室本記曰、在十二箇石室物、若号、高倉
山、と云麗氣記云、彼高山、是日本鎮符、驗、或神
書云、於外宮、有岩戸、今号、高倉山、岩屋、高一丈二尺
廣一丈五尺、奥二丈五尺、有之、山、岩屋也、此岩屋、保孝
よ、也、は、且、と、あ、之、と、大、高、司、との、是、く、也、あ、れ、松、く
切、く、く、松、の、松、く、 是、を、子、と、説、ハ、説、と、く、 歟、雜、續

古、く、は、太、神、宮、よ、ま、し、と、き、り、付、あ、枝、の、松、を、傳、傳、傳、智、
世、代、に、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、
於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、於、
古、く、は、乃、夜、の、果、風、よ、こ、玉、願、例、と、て、と、ハ、一、本、
か、り、又、松、の、村、立、と、云、も、砂、所、の、事、也、と、云、伝、あり
又、か、り、く、ま、あ、し、を、松、乃、村、立、と、云、と、も、い、は、り
新、古、く、
一、仲、山、右、お、藤、の、前、も、あ、り、名、取、は、皇、乃、く、ふ、方、山、也、
仲、山、と、云、を、く、ん、か、り、砂、所、あり、傳、は、宗、宗、宗、上、人、用
基、之、入、山、宗、と、云、ち、者、足、原、仲、山、と、云、又、それ、より

遠西南ノ邊を縁原の岡山乃を名則申公云と云
一 河内社今乃信梳之表と云是乃人類譽本
源外宮別宮篇云御田口社者在井足北從道
西云外宮四十七社之内也

一 井谷清水 名泉といふこせ飯の下の傍文庫より
三河野よりなり岩戸山より下也此之間橋七人等乃
為壁天井有八枚之度石不知造作之人ナラ此
岩屋八万四千諸神來集給依衆生事業計
善惡吉凶給御在所云中古より大岩戸也石
竹也上古系也蓋馬之惡行の時天照右神一天岩

戸乃別名申し〜と云神樂と云奏して岩戸と
をう〜と云きく〜を周の世も晴く〜世迄
日月の光をり由外よ〜いゑ〜の信説よのり
亦岩まの物より人皆思つり〜乃指南と云りり
もろ〜の川の流りり〜と云信の人もね〜
と云云云大日別命と云云々令と云相系と云
〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云
〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云
進之水事當神殿未申方有室殿彼水有其表
是天二上命自天上取下給水也則彼神休也云

所不也とて大原と云

まか ちまう代は酒とけりしる書也藤上信るをけは井の水

たふ云仲房

とあ信物緒しる書ふ乃あふ取ふとてけりそふ
天乃忠極井とて所饌料乃水者とて云清る書ふ
とたつた忠心ととも信ふた貴ととも難は
山とて想してゆまの所ふ信しとて書ふ之也

百葉

おひきてる書ふ橋物にあつたたぬものとみ宗の花
又書ふと郭まびせぬと云たると書ふふあふハ
長あう信物緒し二つあふのゆりあつた書ふ
園信法師の書ふとてたると書ふとせよけふとて

原の松乃むとてと中らハ和文乃清公同松の村立
とて中らとて和文乃清公同松乃村立同く忠せぬと
やと中らとて色をぬとてあつた書ふとてとて
とて書ふとてとてとてとてとてとてとてとて
原の清い山は書ふとて云説又二つあふ乃ゆり書
のたつとてあつたとてとてとてとてとてとて
是れ人々ゆりゆり書ふとてとてとてとてとて
信物欽けきとてとてとて

中後百葉
おひきてる書ふ
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

一 系後院 弘文一書居り一可往南より元七紀よ
み枝の事此書み枝乃系こと中せし人のうつこ
りら移をたふかくいひけりけりといふみ枝とい
し系とい何れもつる係み能くつる一系院所
之乃伊勢大寺日よ大中長み枝といふあり
尚多るなりとい系とい系とい系といの地あり
古書み八井といとすとい台と定と訓といとす
古例多し一池系池軍艦といふ湯林白といふ湯と
よと系系乃水用之其の管多水と朕といふ系
細流のけりハ池系石とい人たえん

一文庫おせう地り西より書乃額ハ善斎道慶乃
筆表の額ハ赤門の所筆跡ありとい書官係文
庫の事也喜の席ハ大神宮の号と後湯成
院の底箱也庫の内ハ棚をけりとい一和漢の書
籍多し一書ハ寄進の連中程板有

宮崎文庫記

末知玄黄之間後有何樂可代讀書之樂也所謂
至哉天下樂終日在几案若能熟讀眼界潤胸腹
飽地步高要須開明性理保護靈珠夫子之至聖

韋編三絕顏子之明睿簞瓢不倦帶經於畔耘把
卷於負薪牛角之書練裳之螢截蒲而寫閱
市而誦千舞足蹈若將寢食但廢事故每得
典籍構樓架閣薰以芸蕙襲以縹緗或榜巖
崖或絕淵潭碑版錡金之文亦皆無不搜窮而傳
播漢有劉向桓譚晉有張華束皙齊有王儉陸
澄梁有任昉沈約唐有李汝模并宋有李子淑葉夢
得皆書窟主也勢別山田神宮諸生相攸於宮
崎疑土度枚新建文庫飛簷翼以軒翥友
字輶以高驥藏蓄經史子集百家之編及

本朝神祇道之秘錄歷代倭歌集側比設賞
舍以為講習討論之所竊擬別學懸學之儀
軌昔者本朝之隆盛使諸儒居大學寮而讀
五經三史等且有釋尊之禮試科之制偉器碩
量代不乏人菅君江帥是厥巨擘也石上宅嗣殿
其宅為河閼寺別設一院貯儒書名芸亭小野皇
客邀東列建足利精舍置先聖先師像及北條氏
執兵馬之權祕金澤文庫押儒典以墨印章押佛
卷以朱印章及叔末之世風教敗敗墜人才萎蕭
子載寥寥影沉響絕無靈膠之續新絃不如永

則北部有燼步悲夫今斯一舉寧為人力之所
致蓋皇天之錫命不亦悅乎此地之為狀也高
明爽體四望豁如舊外宮封戶之地也故曰官崎
或祿豐宮崎前有神田號天長田及九月初
歛而初獲稻薦內外宮號新嘗祭正南有八束
山相傳奉祠素蓋焉神有鼓嶽天晴氣清則
觀山腹之水簾東南有滝浪山東有尾上山或
曰隱山相傳倭姬命入此山而不出故名有神
路山屬內宮之山也有朝熊嶽煙雲變滅朝暉
夕陰葱秀迥出西南有山宮谷每歲十一月

簡元辰祭妙見星而禱年穀之豐登或云舊
祭泰山府君西有岩戶山有十二石窟故名曰
高倉山屬外宮之山也又有高神容神兩山名建
社祠高神山南有大國王社山下有水名井足清
淵可愛陽旱不縮陰霖不溢土人酌為煎茶水當
盛夏之際滋蔓之草過鬱之木渡蔽矣日來遊者
坐盤陀玩碧波寂為遲暑追涼之取井足比有御
田口社其餘跡之靈景之美難盡繪寫嗚呼諸
生精勒奪葢夙夜匪懈則異日將有著逢掖
之夜陳俎豆之器葢絃歌之聲神其舍諸人

遠之志云常也波浪翻伴勢起神風五十鈴川
工有德是穢宮虛靈齊日洗眼對白銅陰陽允
不測造化自為工豐受亦宗廟內宮共尊崇
皇孫受三器智仁勇相同寶祚與天懷隆盛
永無窮倭姬憑談後齊王索厥躬忌避排中子髮
棄如逢深帝推反故異端不可攻邪曲必當罰
正直即令終黑心早點去丹祈忽感通欲知妙
物理布在古記中遠聲百千里懇懇到海東聞
說同志輩書倉成營功聖經及秘籙行將棟宇
亮早詞即依請代祝表微哀敬香香葢於德採頻
須照忠寄點春秋傳葵須向腫請君教民我
默禱那家豐

壬辰六月上浣日

涉笔東武家塾

戶部法印夕顏卷林道春

伴勢國度會山田請生新營一書庫藏筍倭漢
群書以學習之但不納釋部其崇神風而嚮儒
教者哥哉既而就伴者請余輩之言以為之證我
家嚴作長篇以寄題之於是余亦一吟曰
祖宗景仰伴勢別曩昔倭姬愛相攸至仁雄畧有
前後內外雖異靈德伴博風峻峙宮柱立巍然無

疆久悠悠百王紹運唯一種四姓奉幣絕千秋曰
事古事舍人紀廣成拾遺筆不休茅屋照
儉擬清廟東海姬氏悲無由郡國全蹤志歆饗
原廟何必像漢劉迴立殿上來格處洋平昭明
德孚度天神地祇三千社就中無雙就得儔
羊不觸瑞籬畔神道正統是源流得天平行幸
日東人斬獲廣嗣頭想像弘安遙拜處西鄙覆
沒蒙古舟錄倉大將願書到草創功新克冠籬
鹿苑迓相台旆進守文業成貽孫謀桑城蒼生
皆庇蔭無貴無賤思蓄酬庠序學校又渠椽

中華遠矣不可求東西南南曾及國學本朝陳迹
要探搜蘇氏凶暴同蕭繹文籍何為火中投世爰兵
燹幾回在僅抱遺篇人皆愁諸徒今勒堂雪棠
月奔運了軸々收戎馬古來避宮廟藏書永与
歷世留况今幸逢太平節封戶人家既富賜
宙德風遍神明何處不天遊苟因款請吐括語
英靈可笑戈不優早晚偶告公勞暇橫前願
有澗毛羞

壬辰季夏上旬

禮部法眼春齊林如

勢州度會宮崎文庫記

傳曰王者審立庫之量共是器賦而文籍不
與焉夫庫者凡物之所在也安國治民從近
創遠者必實之內修道德外施政教非安國
治民乎不出戶而知天下在乎歲之後知千
歲之非非從近創遠乎皆是經史之功也庫
不可不設焉三皇帝之書者周史之所掌昭
々矣老軸又為柱下史加施响樓環群玉二
函之藏書久矣哉况又書府書倉書室
書房桌之捕比外連屬乎若就本朝書之

朝廷秘府學寮之外石上氏之芸亭和氣氏
之弘文院藤氏之勸學院播氏之學館院源
氏之獎學院石川氏之書舍管石相府書
齋藤賴長之文庫且野之足利相之金澤之
類亦復不少項年勢州度會郡人同謀歷視
外宮之側迤而新建文庫一間于山田原宮
崎之地三面有廡同志者皆就吾侪之其所
藏則神書為先本朝之郡籍中華之諸典
蕩崇之惟積之至彼枕夾且編則排行之不
納一卷富敬神之意也人之請見者亦不怵

惜誰不輒他借カサ焉既而以介カ周諄告之記
于余且圖其境致以寄之因循延淹漸歷居諸
懇請不止何果疲扼乎乃披圖見之雖不慕陳
香卿之衆瀛而飄々乎有神游意行之趣
想夫觀乾隅則華表千年無青衣小兒
怪者外宮正壹然之神風也膽坎カ則
陽鳥野啣檮衣カ又卿者者固本之郊里也
芥蒼所及每々嚙々者大見原也曠良隅
則城カ離々雁齒駢々者小田也奈壇靈
晴星宿移影者固崎妙宮也眺震カ則二

山相峙二川合流者瀧浪尾上也彼倭姬之仙遊
不還至今仰其肝カ蠶者隱固之幽邃也望巽隅
則渌池消々可洗塵耳者滝谷也寸碧カ堂出
没于晨雲夕霧之間者神路朝熊之遠岑也向
離方則新穀既井玉粒可炊者新掌會御田也
俗稱奈進雄者八束桐也山腋之腋之瀑泉澗
澗焉隱々焉雨後涼吹可刮望眼者鼓嶽
也腸カ埭隅則宮崎氏社田上山宮之晴嵐秀色
可掇カ眇方則巖窟十二移カ巫之數峰者巖戶
岫巖苦敷茵澗草カ疊袍清泉カ感カ沸流螢的樂者

并足之納涼也。碧瓦朱甍，遠通接連者，容神高
神大國魂御田口之諸社也。皆是不出于四顧之
中，可謂多景。余足未踏，目未接，豈唯隨
告云云。及此想像，如與公之賦。天台景瀛
之吟，富士而已。就思，負笈於斯，磁杖
於斯，學習於斯，登覽於斯，入有緇卷對
質之樂意，出有振衣濯足之襟懷，不亦善乎。
然而舟車之與風月，玩倘或流連，怠致則非
文庫遊觀之所。期乎冥注意於茲，柳伊勢兩
宮者，本朝之大廟，神事之宗源也。神道即

王道々々，儒道果無二致。安國治民，從近創遠
之理本在其中。文庫不可不持設，豈首國運
隆盛之日六十餘列，各置學校。當此時，伊勢列
學在于兩宮之邊傍，耶未可知也。寥寥々々，無聞今
幸如此，可以躅矣。凡厥諸生，莫求利達，莫趨
異途。然者，則可協神意者乎。諸曰：靡不有始，
鮮克有終。今既有始，所冀其克有終。豈吾怨
前程之或怠倦，嗚呼神道之正也。佛枝之邪也，水
戾之不相容也。次矣推其浮屠之自私自利，伺其覺
味其鬻首揚佛本神迹之言，而各區勝境多為

己有_カ遂使_ト卜祝隨_レ役之_レ使_レ忘_レ其家學_ヲ黨_ハ彼_ハ黠_カ胡
偽作_レ三部神經_ヲ妄唱_レ西部習合之說_ヲ於是神佛
混諸_レ正邪糊塗_ヲ周幣_ヲ極_レ矣_ハ何神不佛何宮無寺何
社無僧_ト唯獨_ト伊勢宮則不然誰不竭_レ敬仰
之誠_ヲ卒然而彼猶曰其本地大是曰僧行基
詣_レ神宮也曰圓仁所定_レ番神之一也其益浪
之甚_ト侮_レ天誣_レ神不堪_レ文息之至_ト勝_レ今庫藏之
神書亦是本迹習合_レ玩雜_レ早穰者可多有之
取捨_レ束縛_レ何不着_レ眼_ヲ卒若_レ苟_レ物_レ泥_レ于神書之
名而已則非_レ貴_レ取也思之_ト吓_レ夫_ト本朝之文庫

嚮_レ所言者皆以_レ廢絕_レ足利漸_レ為佛徒金澤僅
有_レ遺址痛哉_ト倂勢者民庶之所_レ士著_レ也閩國之
所_レ恭_レ畏_レ也兵虜之所_レ不_レ掠_レ也凶賊之所_レ不_レ侵_レ也此
境而有此庫此庫而有其書書不_レ亦_レ宜_レ乎平時借
爵_レ彼之不_レ廣_レ則善信之_レ若_レ越_レ兼_レ良_レ公之桃花坊今
亦_レ可_レ無_レ其憂_レ敬_レ之_レ武_レ至_レ若_レ獨_レ支_レ之_レ鉅_レ橋_レ鹿_レ臺_レ十
八子之瓊_レ林_レ大_レ盈_レ輪_レ奘_レ矣_ハ富有_レ則_レ富有_レ
矣_ハ然_レ器_レ財_レ多_レ而_レ已_レ其_レ糜_レ國_レ蠹_レ民_レ故_レ不_レ又_レ散_レ失_レ
唯_レ取_レ之_レ而_レ有_レ益_レ用_レ之_レ而_レ不_レ竭_レ所以_レ為_レ安_レ國_レ治_レ民_レ
之_レ資_レ者_レ書_レ庫_レ也出_レ入_レ此_レ庫_レ者_レ可_レ不_レ損_レ乎_レ可_レ不_レ勵_レ

平庫云五庫之量ヨシキイロヤ云神其道神其書敏而好學ハハ庶テハ平其可也オラレ

水龍林鐘上澗

欽亭丞三子林靖

白列有餘地故立管城

魚三子又歌

神之國兮就最貴

内外俱字

皇太神

神之運兮傳百世神之宮兮峙萬春神之風兮氣駘蕩神之山兮勢嶙峋神之道兮深且遠觀所設兮是聖人胸中易兮陰陽著天之命兮賦予均大無外兮包六合小無内兮乃微塵何自自暴兮何自棄萬物理兮備我身書千卷兮以過故庫一宇兮盡知新不入老兮不入佛宜服膺兮宜書紳二三子志可賞過半途兮莫廢湮

